

耳を閉ざした民への預言 エレミヤ書6章

本日はエレミヤ書6章の預言から学んで参ります。

エレミヤ書5章の預言においては、一貫としてエルサレムは罰されるべきかという問いが追求されていました。その問いを追求した結果、神は「罰さなければならぬほど民の状態は悪い」という答えに到達しています。

しかし、その結論に達してもなお、神はエレミヤを通して語り続けました。6章においては、罰することがすでに決定していた民への預言が記録されています。神の警告を無視し続け、神に対して耳を閉ざした民にも、エレミヤは語る事が求められています。

その預言には少なくとも二つの特徴があります。まず、民が悔い改める可能性はもはやほとんど追求されていません。それは、神は民に希望を見出すことができなくなったからだと思われれます。次に、預言が民に発せられているものの、形だけ民に語っているような状況であるという特徴があります。さらには、民への宣告の一部は諸国に語られていますし、エレミヤにだけ語った部分もあります。審判はいよいよ近くなり、民には直接的な預言さえ与えられない状況になったようです。

1

ベニヤミンの子らよ、エルサレムの中から逃れ出よ。テコアで角笛を吹き、ベテ・ハ・ケレムでのろしを上げよ。わざわいが北から見下ろしているからだ。大いなる破壊が。

北から来る敵であるバビロンはエレミヤの預言のテーマです。1節はそれから逃れるように警告を発した預言であります。通常、逃れる場合はエルサレムのような要塞に逃れますが、ここでは「エルサレムの中から逃れ出よ」ということは意外なことであろうと想定されます。

ここで言及されている「テコア」と「ベテ・ハ・ケレム」はそれぞれエルサレムの南にあったと思われれますので、北から敵から南に逃れるように警告したことになります。

よって、この警告では、エルサレムがまだ破壊される前に、南に逃れ、そこで遠くの敵が探知されたことを表す、のろしを上げ、角笛を吹くように勧められています。敵が来ること、そしてエルサレムが破壊されることがすでに確定していることを預言は現しています。

2-3 節

2 娘シオンよ、おまえは美しい牧場にたとえられるではないか。3 そこに羊飼いたちは自分の群れを連れて行き、その周りに天幕を張り、群れの羊は、それぞれ自分の草を食べる。

このたとえは1節の延長線上にあると思われます。「娘シオン」とはエルサレムのことです。それは美しい牧場のようであり、羊飼い、すなわち敵はそこに吸い寄せられます。そこにある草、すなわち、分捕り物を回収しに来て、用事が済んだら去っていくということでしょう。

このたとえにおいては、エルサレムは草でしかなく、当然、抵抗する想定はありません。エルサレムを攻略できるかということは問題になっておらず、すでに略奪されるが決定事項となっていることが前提となっています。

次には敵の攻撃の描写が預言されています。敵は勢いよく攻めてきた結果、エルサレムはあっという間に劣勢となり、慌てふためきます。

4-5 節

4 「シオンに向かって聖戦を布告せよ。立て。われわれは真昼に上ろう。」 「ああ、残念だ。日が傾いた。夕日の影が伸びてきた。」 5 「立て。われわれは夜の間の上って、その宮殿を滅ぼそう。」

冒頭で聖戦が布告されますが、エルサレムを攻撃することを命じているのは、究極的に神であります。

「立て。われわれは真昼に上ろう」という発言は敵の自信を表しています。通常、真昼は暑くて疲れますので、真昼に敢えて戦うことはありません。それなのに彼らは攻めに來ます。

続く「ああ、残念だ。日が傾いた。夕日の影が伸びてきた。」はエルサレム側の反応を表しています。旧約でよくあるように、人生が「日が沈む」ことに喩えられている過程しますと、「夕日の影が伸びてきた」ということばは人生の終わりが近づいていることを民が自覚していることを表します。ようするに、敵の勢いは思いの外強く、負けを悟ってしまったということでしょう。しかし、籠城した以上、後悔したところでもう遅いのです。

その夜には、敵はすでに宮殿に達しています。「立て。われわれは夜の間の上って、その宮殿を滅ぼそう。」すでに城壁は破り、宮殿で抵抗している残党と戦っているようです。夜に敢えて攻める必要はありませんが、敵は容赦がなく、その日の内に戦いを終えよう

としています。

続く部分でエレミヤは、万軍の主の命令を聞きます。お読みする6節は私訳となっています。

6-7 節

6 このようになるのは、万軍の主がこう言われるから。「木を切って、エルサレムに向かって壘を築け。これは罰せられる都。その中に虐げがあるのが、そのすべて。(6節、私訳)

7 井戸が水を湧き出させるように、エルサレムは自分の悪を湧き出させた。暴虐と暴行がその中に聞こえる。病と打ち傷がいつもわたしの前にある。

神はエルサレムと共にいたのではなく、外にいる敵軍と共におられました。その理由は敵軍に正当性があるからではなく、エルサレムで憎むべきことが起きていたからでありました。

虐げは例外的に起きていたことではなく、それがエルサレムのすべて、その本質でありました。例外的なことであれば、やがて悪は浄化されるものの、エルサレムの場合は悪が次々と湧き出ていました。神の目には、それが井戸に湧く水の様子と似ているように見えていたようです。もう修復不可能であるからこそ、エルサレムは滅びなければなりませんでした。

さて、1-8節を共に読んでまいりましたが、冒頭で申し上げました通り、民の悔い改めの可能性はほとんど追及されていません。代わりに、その審判の様子が描かれています。確かに、民の内面的状態についても触れられていますが、悔い改めを促しているわけではありません。続く8節も例外ではありません。

8 節

8 エルサレムよ、懲らしめを受けよ。そうでないと、わたしの心はおまえから離れ、おまえを、人も住まない荒れ果てた地とする。」

神の発言には、未練がましいと思えるほどの愛が見られます。しかし、その愛と忍耐にも限界があると神は語っています。ここで言われる「心が離れる」とは、エルサレムを特別扱いしなくなることを指しています。

ただ、このことばは悔い改めを期待したことばだとまでは言えません。むしろ、来たるさばきについて語る中、神はご自分の心がエルサレムから離れていっていることに気付き、そのことに危機感を感じたということではないかと思われれます。つまり、エルサ

レムを荒れ果てた地とする感情的な土壌が出来つつあることに気付き、それを懸念し、たとえそれが聞かない民であっても、警告せざるを得なかったのではないかと考えられます。民は、神に愛と忍耐がある内に懲らしめを受けなければ、容赦ない神の怒りが降り注いでしまいます。

それは9節の預言のことばからも伺えます。

9 節

9 万軍の主はこう言われる。「ぶどうの残りを摘むように、イスラエルの残りの者をすっかり摘み取れ。ぶどうを収穫する者のように、あなたの手をもう一度、その枝に伸ばせ。」

ぶどうを摘む際、一房も取り残さないよう、入念に摘むように、神はエレミヤに命じます。つまり、民の中で審判から逃れる人がいないようにという神の命令であります。これはエレミヤに命じたことではありますが、その命令についてすれ違いがあったようです。10節は私訳をお読みいたします。

10 節

10 私はだれに語りかけ、だれを諭して聞かせようか。見よ。彼らの耳は閉じたままで、聞くこともできない。見よ。主のことばは彼らにとって、そしりの的となっている。彼らはそれに関心がない。(私訳)

エレミヤは神のことばを聞いた時、珍しく、問いを持って神に応答したようです。その預言のことばを誰に語るべきかと聞きます。民に語ることに意味が見出せなくなっていたようです。しかし、11節以降を見れば明らかのように、これは民を諭すためのことばではありませんでした。これは怒りのことばであり、関係を断つようなさばきのことばでありました。

11節に進む前に、ここで言及されている「民を閉じた」の状態について解説しておきます。ここで言われている「耳を閉じた」の原語は「アレラー・オゼン」で、これは直訳しますと「耳に割礼を施していない」という意味です。結論だけ申し上げますと、これは「聞かない」ということではなく、都合の良いことしか聞かず、都合の悪い部分を指摘することば、自分の恥ずかしい姿を指摘するようなことばについては分からないといった意味だと思えます。したがって民は、言われた内容に無関心でした。

11-12 節

11 主の憤りで私は満たされ、これを収めておくのに耐えられない。「それを、道端にいる幼子の上にも、若い男がたむろする上にも、注ぎ出せ。夫はその妻とともに、年

寄りも齡の満ちた者も、ともに捕らえられる。 12 彼らの家は、畑や妻もろとも、他人の手に渡る。 わたしがこの地の住民に手を伸ばすからだ。 ——主のことば——

憤りが注ぎ出される対象は大人だけでなく、幼子に至ります。9 節において「イスラエルの残りの者をすっかり摘み取れ」と言われた時、それは文字通り、全員にということだったのです。

ここで一点補足いたしますが、ここで言われる「憤り」は原語において「ヘーマー」です。これは単なる怒りではなく、暴力に至るような激しい怒りのことを言います。それは神の怒りそのものですが、エレミヤも同じ怒りで満たされています。エレミヤも預言者として神のことばがどのように扱われているのかを体験し、暴力的な怒りに満ちたようです。その怒りを注ぎ出すというのは、9 節の預言のことばを怒りのことばとして語るということだと解するべきでしょう。応答を得るため語るのではなく、審判を告げるのであります。

それにしても、さばきの決定的な前兆が「怒りのことば」であるというのはなんとも不気味なことではないでしょうか。

13 なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得を貪り、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。 14 彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒やし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。 15 彼らは忌み嫌うべきことをして、恥を見たか。全く恥じもせず、辱めが何であるかも知らない。だから彼らは、倒れる者の中に倒れ、自分の刑罰の時に、よろめき倒れる。 ——主は言われる。」

民の問題はいろいろとあったと思われませんが、その問題の本質的な部分を神はエレミヤに言い表しています。ようするに、民の恥の感覚は完全に麻痺してしまい、感じるべき恥が感じられない状態となっていると神は指摘します。罪を告白するための土壌さえありません。ただし、ここでは、民の傷についての言及がありますので、問題があること自体は意識されていたようですが、それが恥ずかしいとは思っていなかったようです。罪を至って曖昧に認識していたというようなことでしょう。

しかし、民を咎めるべき祭司や預言者たちもその役割を果たしていませんでした。彼らの発言は「平安だ、平安だ」ということばに集約されています。彼らは「平安」という人間きの良いことを語ることを好んだようです。教師たちは「傷」、つまり罪があること自体は認識していたようですが、その深刻さを分かっておらず、表面的な解決ばかりをしていたようです。つまり、利得を貪っていた加害者である民の罪を責めるどころか、教師たちは民に媚びて、平安だと伝え、加害者側を慰めていたようであります。

本来、誰かが罪を告白した場合、律法を通してその違反の深刻さを教える必要があっても、教師が神の赦しの可能性についてその場で言及する必然性はありません。理由はいろいろとありますが、たとえば、人は「自分は赦されて当たり前」といった、高慢な態度や、同情を得られて当たり前だという態度で罪を告白することが多く、それは恥知らずな偽りの告白で、当然、赦される資格がありません。人間関係においても、そのような態度であれば赦されません。

本来教師は人を誠実な罪の告白へと導くことで精一杯なのであります。しかし、イスラエルの教師たちは罪を告白する人が来ると嬉々として神の赦しを勝手に宣言するタイプの間人であったようです。その表面的な解決の結果、深刻な問題が依然として残っていても、漠然とした「平安だ」という意識が蔓延していました。このようにして、教師たちは民が癒されることを阻み、それで民の希望は完全に断たれてしまっていました。そのような偽りの平安の世界観の下に生きる民を、神は滅ぼすことが 15 節では語られています。

漠然として神との関係が「平安だ」という意識を持ち、神を礼拝しているつもりになりつつも、心の奥底では神のこぼを拒絶している、民の内面が続く箇所でも描かれています。19 節は私訳ですが、それ以外は新改訳のままです。

16-21 節

16 主はこう言われる。「道の分かれ目に立って見渡せ。いにしえからの通り道、幸いの道はどれであるかを尋ね、それに歩いて、たましいに安らぎを見出せ。彼らは『私たちは歩まない』と言った。 17 わたしは、あなたがたの上に見張りを立て、『角笛の音に注意せよ』と命じたのに、彼らは『注意しない』と言った。 18 それゆえ、諸国の民よ、聞け。会衆よ、知れ。彼らに何が起こるかを。 19 地よ、聞け。見よ、わたしはこの民にわざわいをもたらす。これは彼らの企みの実。彼らがわたしのこぼに注意を払わず、わたしの律法を退けたからだ。(19 節、私訳) 20 いったい何のために、シェバから乳香が、また、遠い国から香りの良い菖蒲がわたしのところに来るのか。あなたがたの全焼のささげ物は受け入れられず、あなたがたのいけにえはわたしには心地よくない。」 21 それゆえ、主はこう言われる。「見よ、わたしはこの民につまずきを与える。父も子も、ともにこれにつまずき、隣人も友人も滅びる。」

耳を閉ざした者が礼拝できている気になることが可能であることは驚きであります。しかし、礼拝は民独自の基準で考えているからできていると思えているのです。実際には自己満足に過ぎなかったことが想像されます。シェバからの乳香など、彼らの基準では最上のものを神に献げていました。しかし、神にはその意味が分かりませんでした。

民は意識としては神を礼拝しているつもりでも、無意識の領域で神を拒絶していました。その証拠に、神の律法を退けていたのです。さらに言えば、神が本来は与える必要もない忠告までして民を改心に導こうとされていました。しかし、その恵みに対しても横暴な態度を取り、まったく理不尽な返事を無意識的にしていたのであります。この一連のやり取りは、来たる災いを正当化するものでありました。災いは民自らが招いたものであります。幸いの道を拒絶し、悪い道を歩んだ民は、その悪い道で、一同、一緒につまずくこととなります。

何度か申し上げます通り、エレミヤ書6章ではもう民に対して悔い改めを促す様子はありませぬ。ここでも同様です。18節では、神は民のさばきについてエルサレムではなく、諸国の民に語っています。エレミヤはこの預言を実際に、諸国に行って語った可能性が有ります。

22-26 節

22 主はこう言われる。「見よ、一つの民が北の地から来る。大きな国が地の果てから奮い立つ。23 彼らは弓と投げ槍を固く握り、残忍で、あわれみがない。その声は海のようにとどろく。娘シオンよ。彼らは馬にまたがり、あなたに向かい、一団となって陣を敷いている。」24 私たちは、そのうわさを聞いて 氣力を失い、苦しみが私たちをとらえた。産婦のような激痛が。25 畑に出るな。道を歩くな。敵の剣がそこにあり、恐怖が取り囲んでいるからだ。26 娘である私の民よ。粗布を身にまとい、灰の中を転げ回れ。ひとり子を失ったように喪に服し、苦しみ嘆け。荒らす者が突然、私たちに襲いかかるからだ。

9-21 節においては民には希望がないことが確認され、故に神は憤り、災いが来ることが確定したことが預言されました。今お読みした箇所ではもう一度、1-8 節にあった北からの敵のテーマに戻ります。その軍隊は強力で争い（アラガイ）ようがなく、残忍であわれみがないことが確認されます。しかし、それは神が民に対して持つようになった態度と同一ではないかと思われます。民はあわれむ余地がない状態だったからであります。

しかし、25-26 節においてはエレミヤの助言のようなものがあります。25 節をご覧ください。「畑に出るな。道を歩くな。」また、26 節においては「娘である私の民よ。粗布を身にまとい、灰の中を転げ回れ。ひとり子を失ったように喪に服し、苦しみ嘆け。」と言われて有ります。「ひとり子を失ったように喪に服し」なさいというのは、唯一の子孫を失い、未来の希望が完全に断たれた時のように嘆けという意味です。

このエレミヤの助言も災いの宣言の一部として読むべきです。これは悔い改めの招きとは言えない内容であります。前提として、すでに災いは確定して有ります。エレミヤが

懸念しているのは、その災いを民が甘く見ることであり、故に災いを深刻なものとして受け止めるよう、助言しています。というのは、民は偽って、嘆くことさえしない可能性があるからであります。つまり、24節で語られている通り、敵軍が「怖い」と思いながらも、畑に出ていったり、道を歩いたりするような悠長な生活を続ける可能性があるとしてエレミヤは考えたのです。

実際に、北から敵が来た時の民の行動を思い返すと、その時でさえ、民は神が北の敵を送ったことが受け入れられず、希望があるかのように振る舞いました。それが立派な信仰的な確信だという感覚が民にあったかもしれませんが、神からすれば、それは頑なさでしかありません。しかし、これが神の律法を拒否し、都合の良いことばしか受け入れられない「耳を閉ざした」礼拝者たちの状態でありました。長年「平安だ、平安だ」と民に擦り込んだ教師たちは至って罪深いですが、そのような教師たちを求めた民も言い逃れができません。

27-30 節

27 「わたしはあなたを、わたしの民の中で、試す者とし、城壁のある町とした。彼らの行いを知り、これを試せ。」 28 彼らはみな、頑なな反逆者、中傷して歩き回る者。青銅や鉄。彼らはみな、墮落した者たちだ。 29 吹子で激しく吹いて、鉛を火で溶かす。鉛は溶けた。溶けたが、無駄だった。悪いものは除かれなかった。 30 彼らは捨てられた銀と呼ばれる。主が彼らを捨てられたのだ。

最後に、神と預言者エレミヤの間の会話が記録されていますが、これは6章全体の結論のような役割を占めています。

神はエレミヤの使命が「試すもの」であるということ、エレミヤ書1章では語られていませんでした。ここではじめてそれが明らかにされたようです。エレミヤは民を「試すもの」であると明言されることにより、民のあり方がより強く意識させられたと言えます。エレミヤは民の心に何があるのか、判断しなければなりません。それは真っ当な判断力があれば、可能なことでした。

何故神はそのような使命を与えたのかという点についてですが、民のことがエレミヤにとって他人事であってはならなかったからではないかと私は思います。民が捨てられるべきだというのが「神の評価」でも、エレミヤの評価は曖昧であってはならず、エレミヤも評価し、「私も同意する」とはっきり意識しなければなりません。そうでなければ、エレミヤは神に着いて行けず、審判に伴うさらに厳しい預言をすることはできません。

29節に述べられる精錬について解説しておきます。銀の精錬においては、銀から不純物を取り除く工程が必要でありました。実際の古代の精錬技術ははっきりとは分かりま

せんが、銀から不純物を取り除くために鉛は有用ですので、それを利用していただけの可能性がります。鉛を溶かして銀に混ぜると、鉛に不純物が付着し、銀を洗い落とす役割を果たしますので、そのことを言っているのでしょう。ただし、集めた銀の鉱石に正体不明な不純物が混ざっている場合、この工程を何度通しても、銀は精錬できなかったことが想定されます。そのような場合、その鉱石は諦めて、捨てていたということのようです。

民はまさに捨てられる銀であるとエレミヤは結論付けます。エレミヤは神のことばを語り、民を精錬しようと試みましたが、しかし、どうしても良い結果が得られず、民は耳を完全に閉ざしていると結論付けました。つまり、特定の預言を聞いたか聞いてないかということではなく、民はもとより「聞くことができない」「希望がない」状態であることが、エレミヤの体験の中ではっきりとしたこととあります。その体験を通して、エレミヤ自身も民が「捨てられた銀」だと分かったのであります。

最後に、このみことばから学ぶべきことを短く語り、終わりたいと思います。本日のみことばは、神の民イスラエルについて語られていますが、同じ神の民である教会にも当然、同じ審判が降る可能性があります。

しかし、教会が捨てられるような状況になり得るということは十分に語られて来なかった面があります。それどころか、教会は審判ということ自体から目を背けている面があります。一つの根拠を申し上げますと、1954年に出版された「讚美歌」という讚美歌集の目次には「審判」という項目があり、その下には僅か二曲しかありませんでした。しかし、その後出版された讚美歌集をいくつか拝見しましたが目次からは「審判」という項目そのものがなくなっています。これは戦後の日本の教会においては神の正義と審判について賛美されて来なかったということとあり、神の正義の審判があることについての意識が徐々に薄くなっていることを物語っています。今がすでに、「平安だ、平安だ」としきりに語り合う「耳を閉じた民」の時代であるというのは考えすぎでしょうか。

というのは、「平安だ」と考える人の根幹にあるのは、神の正義と審判に対する無関心なのであります。エレミヤの預言を聞いた民は、聞いて怒っていたというよりも、何故そのようなことを言っているのかがよく分からないという感覚だったのではないかと私は思います。自分たちは災いの対象のはずがないという高慢な思い込みがどこかにあった故、なぜ審判について語る必要があるのか自体、分からなかったのではないのでしょうか。

それは現代の、神の正義と審判に対する態度と似ているのではないかと思わずにいられません。現代においても、自分が災いの対象のはずがない、神がそんなことをするわけはないと漠然と考えてしまっているのではないのでしょうか。しかし、聖書の語る「罪」

や「神の怒り」と照らすと、その考えは当然、間違っています。それは自分の姿を見誤っていることから生まれる高慢さであると言わざるを得ません。律法を知らないからそのようになるのであります。

「礼拝している」という意識を持っていたとしても、神が教会を捨て得ると、私たちは知っていたでしょうか。その暴力的な憤りが教会に注がれる際は容赦がないということを知っていたでしょうか。自己満足な礼拝や、神を侮った態度が、いつまでも赦されるわけではありませんし、神はいつまでも私たちに語りかけるわけでもありません。高慢さが度を過ぎた際には、「一人も逃さない」という趣旨の暴力的なことばが教会に語られ、その後、罰が会衆一同に降ります。その真実をエレミヤ6章から学ばなければなりません。

このことを知ったのであれば、手遅れになる前にみことばを通して、神の基準を学ばなければなりません。仮に、しきりに「平安だ、平安だ」と言う教師がいたとしても、結局は、本物を求めるかどうかは、各個人が決めることなのであり、自己責任であります。

神は、偽りを見抜き、警告を聞き入れる人を探し求めます。災いを通して伝達される、角笛の警告音が鳴り響いても聞かなければ、自分は耳を閉ざした人であったということに他なりません。現代のような警告が多い時代には考えなければなりません。自分は警告を無視し、漠然とした「平安だ」という感覚で満足しているのか。それとも、警告が示す先にある真実を求めるのか。真実を求めたいと思うのであれば、その道を歩む覚悟があるのか。本日のみことばを聞く私たちはその辺りを問われているのではないのでしょうか。

祈り：聖なる神様

私たちはあなたが耳を閉ざしてしまった民には憤りしかなく、容赦なく災いを降すことを学びました。どうぞ、一人ひとりに自分の状態について、その真実を求める探究心をお与えください。また、この時代にも預言者的な教師を立て、教会を導いてください。

イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。